

『夜間中学はいま』

産経新聞大阪本社夜間中学取材班 2023年9月

笹山悦子(愛知夜間中学を語る会)

『夜間中学はいま』は、伐栗恵子記者を中心する「夜間中学取材班」による産経新聞連載記事の総まとめである。全国各地の夜間中学や自主夜間中学で学ぶ皆さんの様々な学びへの思いとその思いに応えたい現場の教職員のみならず、多くの支援者の思いが記者たちによる丁寧なインタビュー取材によって浮かび上がってくる。「夜間中学」は、その時々時代の世相を反映しつつ、ここへ来て更に大きく変貌を遂げようとしている。昼間の学校のあり方、ひいては日本社会の教育のあり方についても一石を投じる内容となっている。

伐栗記者たちの取材を通して、見えてくるものは、「隣にいる人」への気づきがなければ簡単に「いなかったこと」にされてしまう人々の存在だ。学びの機会を失った事情は人それぞれで、その時期によって抜けた学びの内容もそれぞれ。ある人は、戦災孤児として物心つくかつかないかという時期からすでに学びにつながれなかったという体験を語り、またある人は、壮絶なDVや爆撃に怯えた経験を語る。そして近年じわじわと増えている学校という管理体制の中で息がつけずに苦しんでいる人や日本語がよくわからないまま学ぶ機会を失った人たちの思い。こうした人々が抱える事情や思いを知ること、ちょっと立ち止まったその瞬間に、「そういえば、私にも・・・」という「気づき」につながっていく。読者自らが当事者につながる存在であったことについての「気づき」。本書の中にはかつての母の姿や近所のコンビニで働く外国人の姿に重なる方々が登場する。実は、私自身が当事者の家族であったことを改めて痛感するのである。

大阪の夜間中学で学ぶ喜びを語る高齢女性は、「住み込みで子守りをしながら大人になった。」「鉛筆を持った記憶がない」とご自身の来し方を振り返っておられる。その方の体験談は、4年前に亡くなった私の母の体験と重なった。私の母は浅草の大空襲を逃れるために疎開した先で、長女だったがゆえに大家族の弟妹の面倒を任せられ、学齢期に学校へ通うことができなかった元祖ヤングケアラーだ。お腹を空かせて泣く弟妹をおんぶしながら中学校の校庭から授業中の教室を眺めていたという話を聞いたことがある。先生が黒板に書く文字を背中の弟をあやしながら一心に見つめていたという話。私は、そんな母の話が嫌いだった。貧乏で苦しんだ母を恥ずかしく思い、友達の良い目から母を隠したいと思っていた。本書の中で夜間中学生たちが語る「文字を知ったことで世界が変わる」という体験を味わうことなく母は旅立ってしまったが、子どもたちにだけは自分と同じ思いをさせたくないと、私と妹への教育には熱心だった。今だからこそわかる母の心の痛み、世の中から取り残される不安をずっと抱えていたはずだ。大切に育て上げた我が子にまで馬鹿にされる恥ずかしさを実の娘がどうして理解できなかったのだろう。機会があったらもう一度学校で学んでみたらどうかと、あのときなぜ勧めあげられなかったのだろう。

一方で、愛知の管理教育全盛期に教員側の当事者として、理不尽な教育現場に身を投じた私は、目の前で何度も体罰を目撃し、いつしか感覚がマヒして声を上げて抗議できない情けない人間になっていた。長男出産を機に、県立の通信制高校への異動が決まったことで、私は気づこうとしてこなかった自分を大きく変える環境に身を置くことになった。そこでは、日本語がままならず苦勞している中国帰国者の2世と出逢い、また、重い病で昼間の学校に行けない生徒と出逢い、母と同じような経歴で読み書きできずに進学をあきらめていたオモニたちと出逢った。オモニたちの多くは、愛知県と名古屋市との合同事業である「中学夜間学級」の出身だった。

この地方では、ながらく文科省に認められるような公立夜間中学はなかった。その昔、名古屋市内に2校あった公立夜間中学校は、1966年の当時の行政管理庁の勧告により廃校となり、本書に出てくるオモニたちのように中学での学びにつながれずにいた人々が置き去りにされて来た経緯がある。現在では自主夜間中学扱いになっているが、燻る市民の抗議の声を受け、県は名古屋市と協力する形で外郭団体が運営する「中学夜間学級」を特例で開設した。以来、約40年以上にわたって、週3日の授業で2年間通えば本校の卒業証書がもらえることを「公立夜間中学」に準ずる学びの場としてきたのである。ここの生徒募集要項には、全国にはないある条件が付けられている。それは「日本語がある程度理解できること」そして、「入試」があること。本校の昼間の中学生には入試はない。が、夜間中学生には「入試」を課す。こうした実情を一般市民は知らされてこなかった。むしろどんなに「いびつな夜間中学」であろうと、ここに通えば高校進学ができるし、学歴になるということで大っぴらな批判ができない雰囲気もあった。議会での議員たちによる質疑で「夜間中学の必要性」について、何度取り上げられても当局の答弁は「ニーズはない」の一点張りであった。

「ニーズがない」というのは本当か。2020年、コロナ禍で学びが止まって困っている人々がいることをきっかけに、私は有志とともに「愛知夜間中学を語る会」を立ち上げ、当会が主宰し支援する形で「自主夜間中学はじめの一步教室」を名古屋市北区上飯田で開室した。当初学習者は5名。支援者も5名であったが、口コミでみるみる増加し、2024年4月現在登録学習者280名、支援者も80名を越す大所帯となった。身近なところに母と同じように読み書きに苦勞されている高齢者がいることが分かった。私自身が取りこぼしてきた生徒たちと被る困難を抱えて生きるために学びにつながろうとする人々の姿があった。「ニーズ」は山ほどあったのである。こうした実践とともに、2020年度国勢調査結果での「義務教育未修了者」約90万人中、愛知県は全国2位の約4万人、名古屋市は政令市中3位の約1万人もいるという具体的な数字が後押しする形で、「公立夜間中学」設置が急速に進むこととなった。愛知県と名古屋市の初の公立夜間中学は、25年春にそれぞれようやく開校することになった。

本書の中の「夜間中学のいま」は、現在も実にダイナミックに動いている。本書に出てくるような夜間中学生一人ひとりの人生の歩みが、今まさに世の中を動かそうとしているのだ。もう恥じることはない。読める喜び、書ける幸せが人を人たらしめ、誇りを生んでいく。

「学んで頭に入ったことは誰にも盗られん」「学ぶことは生きること」数々の名言がこれから夜間中学で学びたいと思う人々を勇気づけ、奮い立たせ、明日の自分を夢見させていく。誰もが当事者につながる「自分事」として本書を手に取り、それぞれが語る人生に思いを馳せていただきたい。誰も置き去りにしない、させない社会を創っていくために。